

Patlytics 知財AIプラットフォーム 評価レポート

エンタープライズ導入に向けた機能解剖とデューデリジェンス

対象領域：	特許ライフサイクル統合AI基盤
情報基準日：	2026-07-26 (Asia/Tokyo)

※本レポートは公開情報のみを対象に整理したものです。公開資料で確認できない項目は、明示的に「未公開」と記述しています。

The TL;DR Dashboard

対象領域

「フル・ライフサイクル」 - 130M+ patents preloaded。侵害検出から出願、ポートフォリオ管理まで単一環境に統合。

特筆すべき強み

「Citation-backed Outputs」 - 根拠となる引用元を明示する特許特化ファインチューニングモデル。

調達時の懸念

「ブラックボックス性」 - 基盤モデル名、オンプレ対応可否、API仕様が未公開。

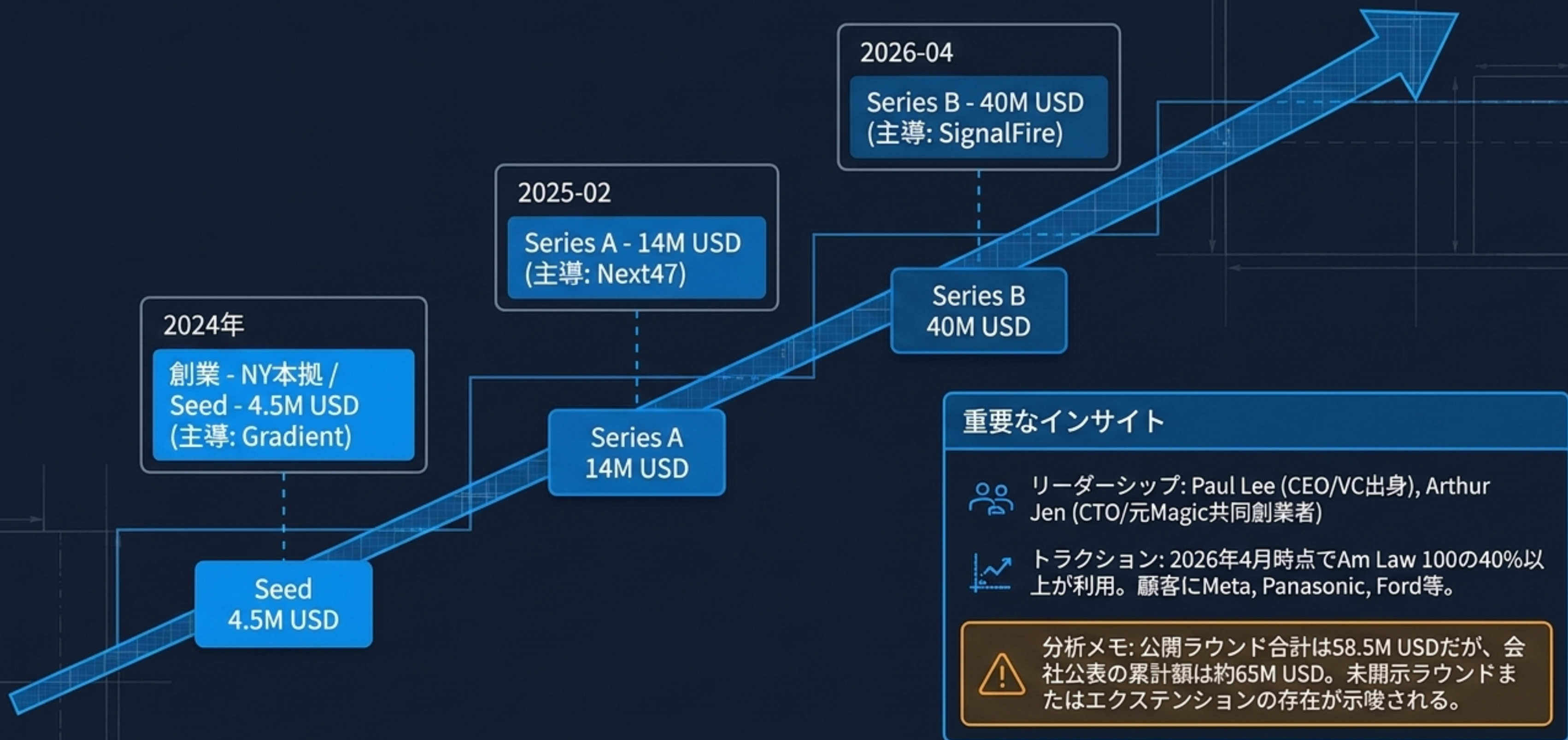
推奨ターゲット

特許訴訟・分析・出願を一気通貫で回したい大企業知財部、特許法律事務所。

導入の必須条件

モデル透明性、厳格なデータ境界、DMS連携を重視する組織は、契約前のPoC検証が不可欠。

会社のモメンタムと成長軌道



先行技術・特許検索

130M+ patents / 300M+ literature (自然言語検索)

ポートフォリオ分析

Heatmaps, pruning, classification

侵害分析・FTO・SEP

limitation-by-limitation
claim chart, 必須判定

Patlytics Agent

モジュール横断で動作する生成AIエンジン

OA (オフィスアクション) 応答

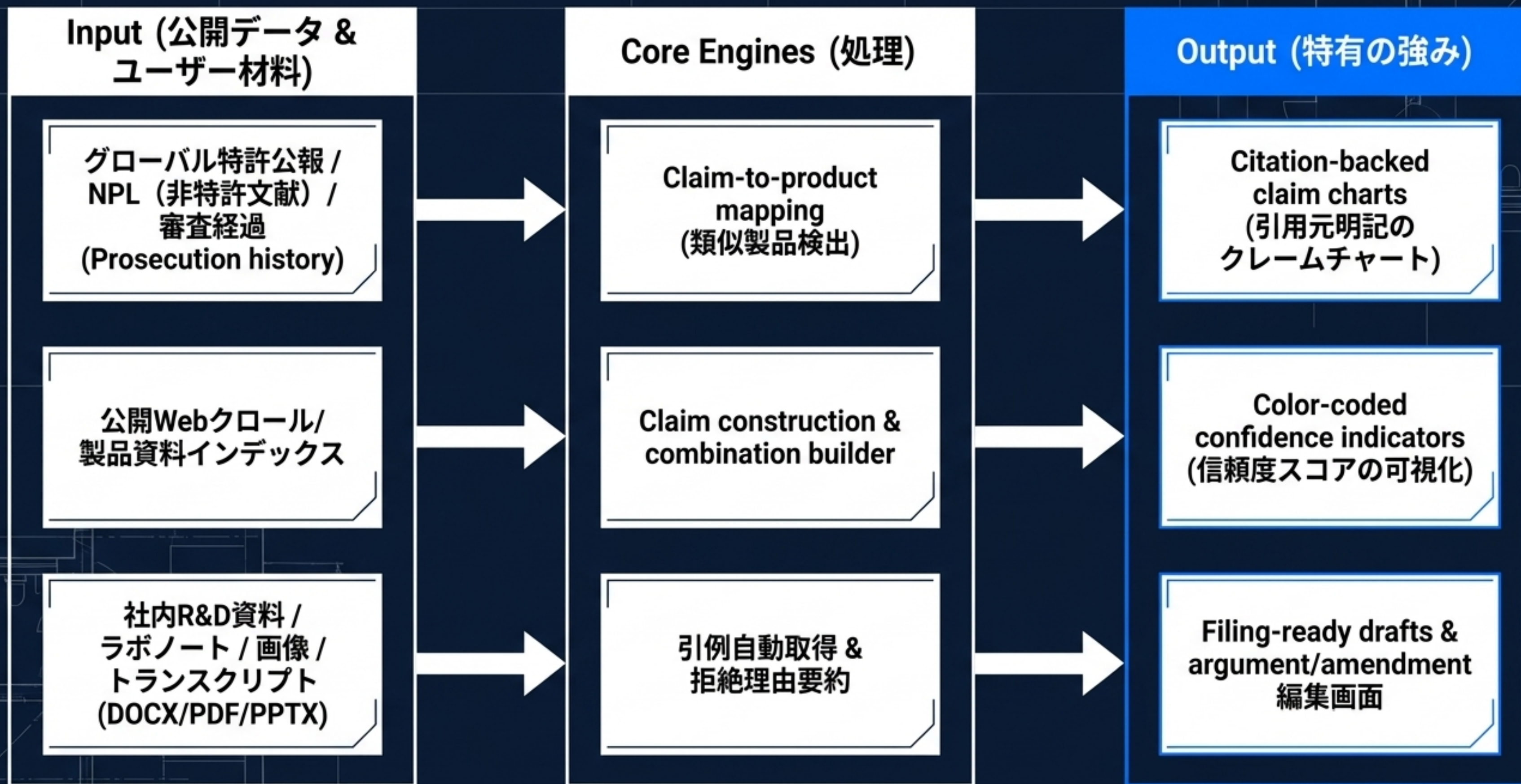
引例自動取得, 応答戦略生成

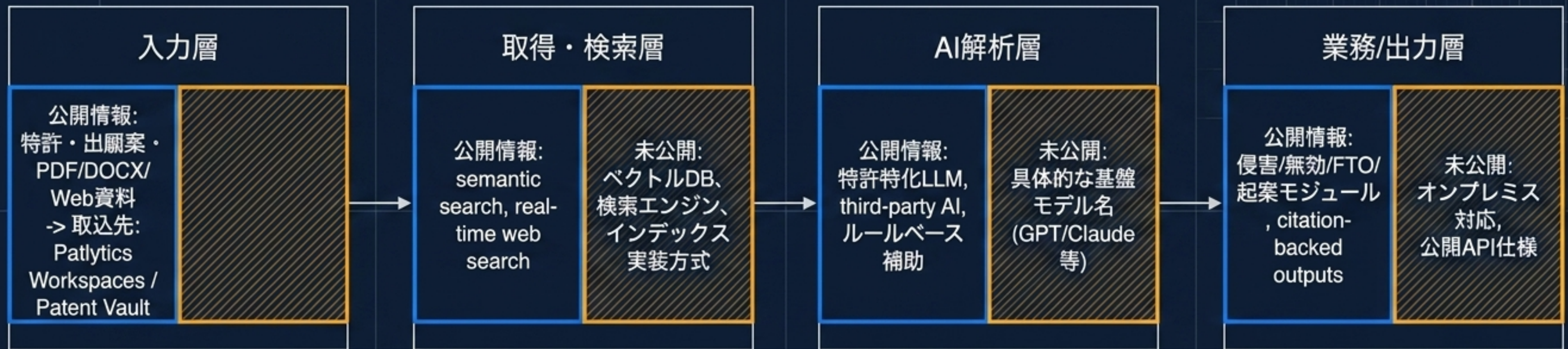
無効資料探索

§102/103/112分析,
motivation to combine

ドラフティング・発明届

DOCX/PDF/技術メモからの変換
filing-ready draft





Takeaway: アプリケーション層の実装は極めて高度だが、バックエンドの技術スタックはブラックボックス寄りの設計。

評価済みの強み (Enterprise Ready)



未公開・要確認事項 (Verification Required)

✓ 認証取得: SOC 2 Type 2, ISO 27001, ISO 42001, GDPR

✓ データ保護: AES-256暗号化, 組織単位のデータ分離

✓ AI学習非利用: "Your data is not used to train or tune models" 明言

✓ データ保持: 履歴90日保持・削除可能

? 利用モデル: Third-party LLMの具体的なサブプロセッサ一覧

? 環境制御: リージョン固定の可否、オンプレ/専有環境の有無

? 統合: SSO/SCIMの対応状況、監査ログの外部連携仕様



法律事務所 (Law Firms)

事例: Am Law 100事務所, RJLF

80% 業務時間削減

120件の特許分析を20時間で
完了

インパクト: ~\$38K added
margin (ポートフォリオ分析時)



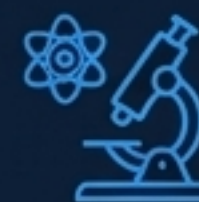
企業知財部 (Corporate IP)

事例: Asahi Kasei (素材・化学)

Months to Hours

侵害調査にかかる期間を
数ヶ月から数時間へ大幅短縮

インパクト: 調査1件あたり
\$1K-5K のコスト削減



R&D・バイオテック (R&D / Biotech)

事例: Publicly-traded biotech,
Rivian (自動車)

20% Workload Reduction

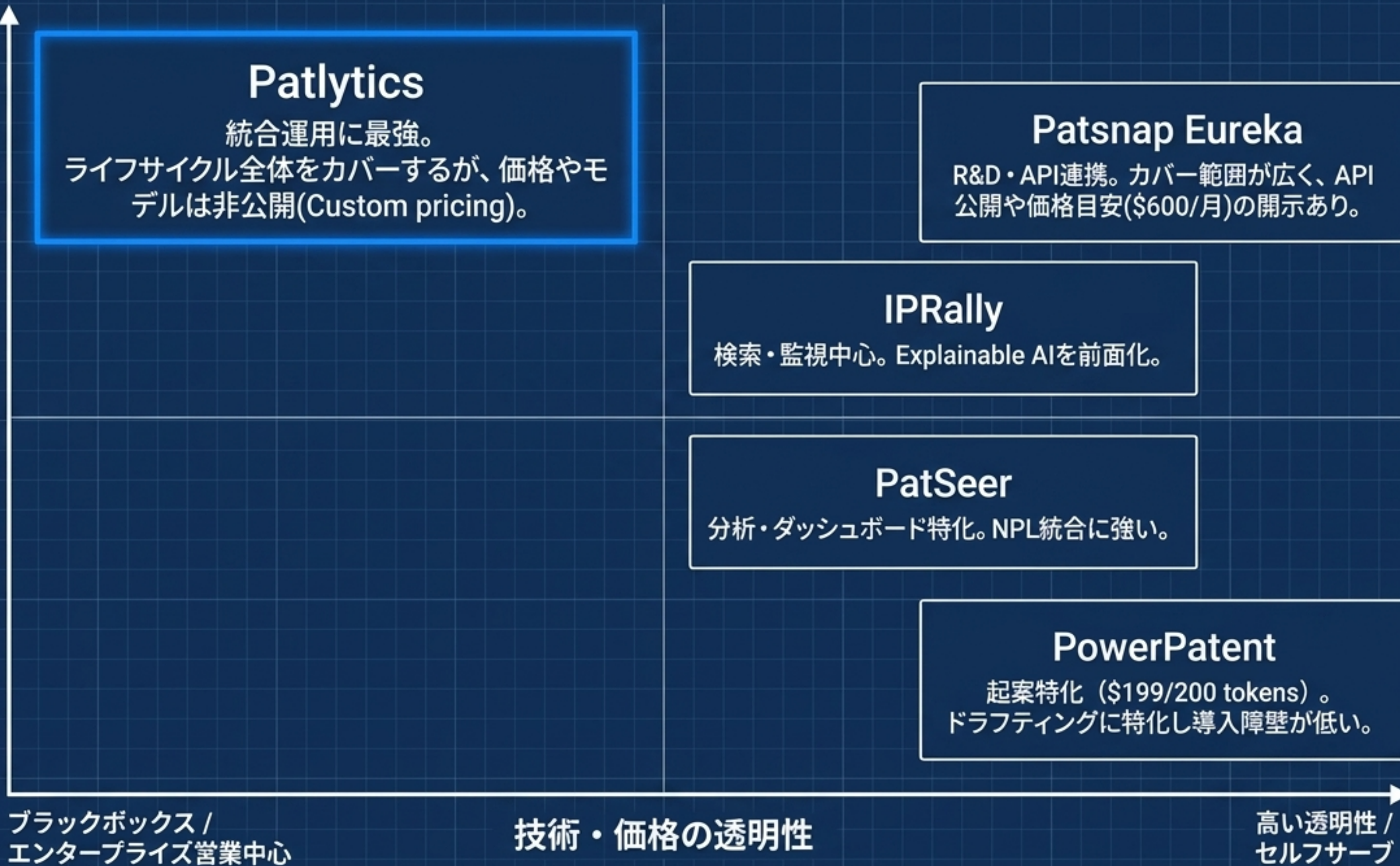
発明届からドラフト整形の
初期整流を高速化

インパクト: 出願1件あたり
\$5K-7.5K の節約

ライフ
サイクル全体

特許実務カバ
ー範囲

特定業務特化



ブラックボックス /
エンタープライズ営業中心

技術・価格の透明性

高い透明性 /
セルフサービス

AIコンプライアンスとユーザー責任



データ利用と機密性

Patlyticsの現状:

学習利用は否定するが、Third-party AIへの情報共有は規約上許容。

ユーザー責任:

投入する情報の機密レベルに応じた社内ポリシーの策定。



著作権 (文化庁ガイドライン)

Patlyticsの現状:

公開Web/製品資料をクロール。権利侵害非保証。

ユーザー責任:

有償論文や競合資料を投入する際の適法性判断。



説明可能性 (WIPOスタンス)

Patlyticsの現状:

Citation-backedで補強するが、モデル中核は未公開。

ユーザー責任:

完全な監査性（ホワイトボックス）までは担保されないことの許容。



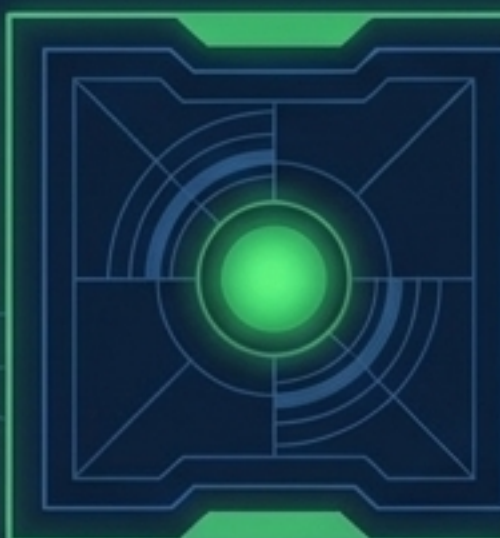
専門家責任 (USPTOガイダンス)

Patlyticsの現状:

あくまでアシスタント。出力の正確性は免責。

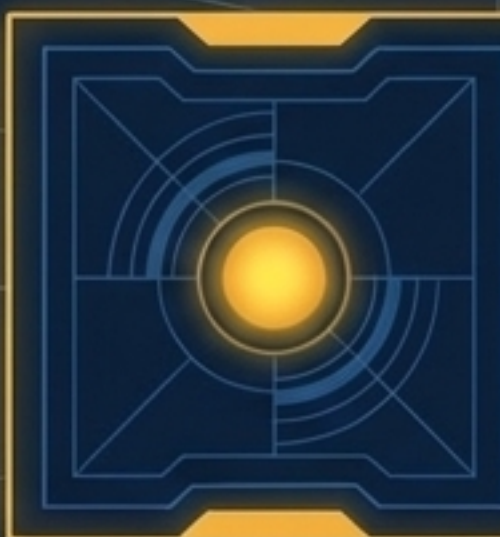
ユーザー責任:

AIツールを利用しても「最終的な人間の検証責任（Human-in-the-loop）」は免除されない。



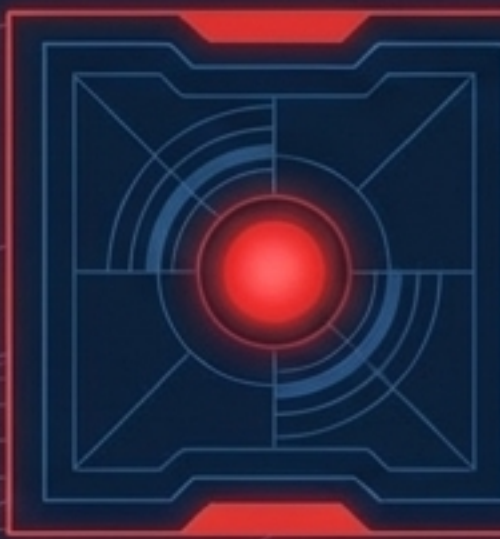
Green [評価済 - 承認プロセスで強みとなる項目]

- 特許ライフサイクル全体の単一UIへの統合。
- SOC 2 Type 2 / ISO取得によるベースラインのセキュリティ。
- 学習利用 (Train/Tune) への不使用明言。



Yellow [PoC環境での検証必須項目]

- 自社に必要な深度 (検索中心か、訴訟中心か) での精度確認。
- 既存DMS、ドCKETティングシステム、BIツールとのデータ連携フロー。
- UI上の出力結果 (Citation-backed) の実用性とハルシネーション頻度。



Red [契約前のベンダヒアリング/DPA必須項目]

- 実際に利用されているLLM基盤モデル名とサブプロセッサ一覧。
- データ処理のリージョン指定とデータ境界 (保持期間と削除SLAの確約)。
- SSO/SCIM統合およびエンタープライズAPIの提供仕様。

Patlyticsは『特許実務の統合AI基盤』として極めて有力な候補である。しかし、厳格な情報統制とアーキテクチャの透明性を求める組織においては、公開情報の外側にある『ブラックボックス』の契約前検証が不可欠である。

Adoption Roadmap (推奨導入ステップ)

